わたし色

長生村立長生中学校　三年　小針　芽奈

「その肌色、とってー。」

「肌色ってどれ？」

先日、私は妹と、こんな会話をしました。そうだった。「肌色」は「うすだいだい」っていうんだった。妹の言葉で、「うすだいだい」という言葉が、私たちの世代よりも世間に定着してきたのだと知りました。私の友達には、肌色こそが皮膚の色だと考えている人がいます。消費者から「肌色」という言葉自体が、差別用語だ、との指摘を受け、色鉛筆は平成十二年、クレヨンは平成十九年に「肌色」という色の表示が「ペールオレンジ」や「うすだいだい」に変わりました。平成十九年生まれの私たちは、幼少期に使っていたクレヨンにまだ肌色が含まれていたことで、呼び方が定着していなかったのでしょう。

肌の色の違いは、見た目ではっきりとわかることから、ずっと昔から差別されるきっかけとなってきました。例えば、十八世紀の哲学者デイヴィット・ヒュームは次のように公言しています。「大方の黒人と、すべての種の人は白人より生まれながらに劣っているのではないか。」と。このような差別はずっと昔のこと。そう思っている人も多いのではないでしょうか。しかし、現代でも、肌の色が違うことによる偏見は、まだ根強く残っていることを、私は最近になって知りました。

ある日、ネットニュースで「黒人女性が出産直後に亡くなった」という記事を見ました。「黒人女性は肌が厚いため、白人女性よりも痛みに耐えることができる。」この迷信から、産後に痛みを訴えても、手術や治療を受けることができず、そのまま命を落としてしまったのです。検索してみると、同じようなケースが何件も出てきました。名前は全て違う女性。今の時代に、このような理由で亡くなった人が、数多くいることに、私は、驚きを隠せませんでした。歴史上のお話としてではなく、肌の色による差別は、現在進行形で続いていたのです。

ニュースを見て心が苦しくなり、「私たちにも、何かできることはないか。」そう考えました。大きな意識を変えるためには、小さな意識を変えることではないか、と私は思います。子供たちの身近にある色鉛筆やクレヨンの色を「肌色」と呼ばず、意識をして

新しい名前で呼ぶこと。それは、肌の色が人種によってさまざまであると考えさせるよいきっかけになったと思います。

私の担任の先生は、海外に住んでいたことがあるのですが、このようなことを教えてくださいました。

「外国には、スキンカラーといって、何種類もの肌色が入っているクレヨンのセットがあるんだよ。ピーチとかアプリコットとかさ。」私はこれを聞いて、「これだ！」と思いました。このクレヨンができる前は、黒人の人たちは、その国の「肌色」に、茶色などを混ぜて、自分の肌の色を作っていたそうです。日本の大手化粧品会社でも、一人一人の肌色を再現したクレヨンをつくり、子どもたち同士で「みんなそれぞれ肌の色がちがうんだ」と認識してもらうプロジェクトを開催しています。

同じ人種の人間であっても、一人一人肌の色は全然違います。人がいる分だけ肌の色があります。自分の肌色は、この世の中に一つしかないのです。肌の色も、目の色も、髪の色も、性格も、「みんな違ってみんないい。」私はそう思います。「嫌いだから認めたくない。」私もたまにこう思うことがあります。しかし、無理に好きにならなくていい。大切なのは、違いを受け入れて、その違いを互いに尊重することだと思います。これから大人になる子たちが、自分や他人を普通に認めあえる世界になることを私は、強く願います。